

カヤコオロギの生息地とその生息環境

植田 義輔

筆者は、改訂・兵庫県版レッドデータブックのBランクに位置づけられているカヤコオロギ *Euscirtus japonicus* SHIRAKI の生息地を3カ所確認しているのので、これを紹介するとともに生息環境や摂食行動について若干の知見を報告する。

1. 生息地とその環境

①赤穂市西有年有年大池(134° 20' E, 34° 48' N, alt.100m)

この生息地を最初に確認したのは、2002年9月16日である。この生息地は、谷をせき止めてつくられた比較的大きなため池の土手である。カヤコオロギは土手の上部から斜面中部に至るまで生息しており、個体数は多かった。環境について記すと、土手の上部はネザサが優占しているものの草丈は10cm~20cm程度と非常に低く抑えられており、定期的に草刈り管理がなされていることが推測された。ここでは、コガンピ・マルバハギ・テリハノイバラ・カナビキソウ・リュウノウギクといった比較的乾燥した立地を好む植物が多く生育しており、ワレモコウやツリガネニンジンその他、近年減少が指摘されているキキョウやオミナエシのなど里草地に生育する植物も確認された。一方、斜面の中部では、ワラビ・マルバハギ・イネ科の一種が草丈30cm~60cmほどに茂っており、土手の上部とは少し異なった環境となっていた。ただし、土手の上部および斜面中部ともに乾燥した立地であることに変わりはない。参考までにこの時に確認された直翅類について記すと、クルマバツタ・トノサマバツタ・ショウリョウバツタ・ショウリョウバツタモドキ・オンブバツタ・ウスイロササキリ・ハラオカメコオロギ・エンマコオロギ・ツツレサセコオロギなどであった。

2004年9月11日に証拠標本を得るために再び現地を訪れた。環境は2年前とほとんど変わっておらずカヤコオロギも多



写真-1 有年大池土手の生息環境

数確認され、4♂4♀を採集した。ここは、本種にとって良好な生息環境であると考えられる。有年大池土手の写真を写真-1に示した。

②赤穂市西有年長谷池(134° 19' E, 34° 48' N, alt.100m)

この生息地も、谷をせき止めてできた比較的大きなため池の土手である。有年大池のある谷の北隣の谷に位置している。この生息地を確認したのは2004年9月11日、有年大池の土手にカヤコオロギが生息しているのなら、隣の谷にも生息しているのではないかと予想して訪れてみたのである。この土手の環境は上記の有年大池とは異なっており、植生が比較的疎で、どちらかというと荒地地状を呈しており、土壌はやや礫質である。生育している植物は、草丈40cm程度のメケンカルカヤが優占しており、その他にはリュウノウギク・ヨモギ・ヤハズソウ・カナビキソウ・コマツナギなど乾燥した立地を好む植物が生育していた。カヤコオロギを探してみたもののなかなか見つからず、半ば諦めかけていた頃に1個体確認することができたが、採集することはできなかった。ここは、本種の生息地としては不適当な環境であると考えられる。なお、参考までにこの時に確認された直翅類について記すと、クルマバツタ・ショウリョウバツタ・マツムシ・ミツカドコオロギ・オンブバツタ・エンマコオロギ・ショウリョウバツタモドキなどであった。

③神戸市北区道場町生野武庫川河川敷(135° 15' E, 34° 52' N, alt.140m)

この生息地を最初に確認したのは2002年9月22日である。ここを訪れたきっかけは、この周辺にギンイチモンジセセリが生息しているとの話を聞いたことがあり、本種の生息環境を見てみたいと思ったからである。詳細な情報はわからなかったのので、とりあえず、JR道場駅を降り、武庫川にかかる県道327号線の橋を渡り、川の右岸の堤防沿いを上流に向かって歩きながら探索してみた。結局、ギンイチモンジセセリは見られなかったものの(時期も悪いのだろうか)、歩道沿いの草むらでカヤコオロギが多数確認された。環境について記すと、カヤコオロギが確認された地点は、堤防の斜面に草丈40cm程度のチガヤが優占しており、その他の植物ではキバナカワラマツバ・トウダイグサ科の一種・ツルボ・カナビキソウなどが生育していた。参考までにこの時に確認された直翅類に

ついて記すと、オナガササキリ・マツムシ・スズムシ・オンブバツタ・ツユムシsp・ハラオカメコオロギ・クサヒバリ・カンタン・シバズなど、赤穂市の有年大池とは異なったファウナが成立していた。

2004年9月12日に証拠標本を得るために同地を訪れたが、植生の遷移が進行しており、クズ・ススキ・セイタカアワダチソウなどの高茎草本が繁茂し、環境はすっかり異なっていた。カヤコオロギを探してみたものの、なかなか見つからず、2個体ほど見かけただけで、証拠標本を得ることはできなかった。植生が繁茂していたため、探索効率が低下していたことは事実であるが、しつこく探してみてもほとんど見つからなかったことから、この地点はこのまま放置すれば本種の生息環境としては悪化の一途をたどりつつあるのではないかと推測された。

2. 摂食行動の一例

2004年9月11日に赤穂市の有年大池を訪れた際にカヤコオロギの摂食行動を確認することができたので少しふれておきたい。ここでは、多数の本種が生息しているので、しばらく観察していると、15時15分にネザサの葉の上面に静止し、葉の表面をなめるような行動をとっている雌個体が目撃できた。その行動はしばらく続き、やがて葉の中心に穴があいた。ここから、さらに摂食を続け、15時50分まで続いた。後で、周辺に生育しているネザサを見てみると、葉の中央部付近に楕円形状ないしは長楕円形状の穴があいている葉が多数確認された(ただし、中央脈部分は避けている)。これらは、おそらくカヤコオロギの食痕である可能性が高いと考えられた。実際に摂食行動を観察したのはこの1例だけであったが、葉の縁からではなく、葉の中央付近から摂食を始めることに興味深く感じた。ネザサの食痕については、写真-2に示した。



写真-2 ネザサにみられる食痕

神戸市北区(藍那)でキボシマルウンカを採集
植田 義輔

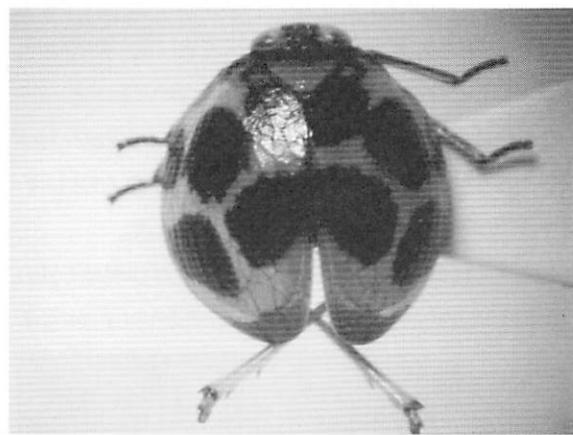
神戸市北区山田町藍那(135° 07'E, 34° 44'N, 標高230m)でキボシマルウンカ *shiharanus iguchii* Matsumuraを採集したので報告する。

採集データ:

13exs., 12.VIII.2004; 2exs., 18.IX.2004;

1ex., 17.X.2004

いずれも、神戸電鉄藍那駅北西部の里山林の林縁部をスウィーピングして得られたものである。特に、8月12日は、採集個体以外にも多数個体を確認しており、多産しているといえる状況であった。本種の産出状況は、山地でみられるがまれであるとされているが¹⁾³⁾、このように多数確認されたので報告する次第である。また、寄主植物はナガバヤブマオなどのイラクサ科植物とされているが²⁾、今回は林縁部の比較的広い範囲から得られたので、当地における寄主植物を特定することはできなかった。本種の属する頸吻亜目 Auchenorrhynchaはマイナー昆虫のひとつであるが、本種はテントウムシに類似した特徴的な斑紋を有した美麗種であり、この報文を期にさらなる分布および産出状況の情報の報告を期待したい。



キボシマルウンカ